

さよなら おじいちゃん ……ぼくは そっといっただけ

エルフィー・ドネリー 作 かんざき・いわお 訳



作者／エルフィー・ドネリー

1950年、イギリス生まれ。幼・少女期をオーストリア人の母とともにウィーンで過ごし、現在は、放送作家として西ベルリンに在住。一児の母。

訳者／かんざき・いわお (神崎 巖)

1935年、東京生まれ。1961年、早稲田大学文学修士。現在、早稲田大学教授。訳書に「ぼく よわむじやない」「ベッヒャー詩集」など。

さよなら おじいちゃん……ぼくはそっといった

1981年2月 第1刷発行

原 作 エルフィー・ドネリー

翻 訳 かんざき・いわお

発行者 浦 城 光 郷

印刷所 東 京 印 書 館

製本所 協 栄 製 本

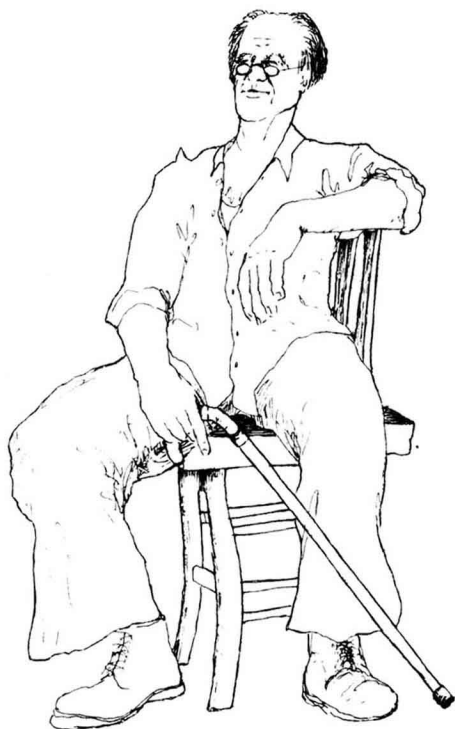
発行所 さ・え・ら 書 房

東京都新宿区市谷砂土原3-1 振替 東京4-87244 代 03-268-4261

© 1981 IWAO KANZAKI NDC 943 ISBN 4-378-00712-6

さよなら おじいちゃん ……ぼくは そつと いった

E・ドネリー 作／C・B・ザーディール 絵
かんざき・いわお 訳



さ・え・ら 書房

Original title "Servus Opa, sagte ich leise"
by Elfie Donnelly
©1977 Cecilie Dressler Verlag, Hamburg
Japanese translation rights arranged with
Cecilie Dressler Verlag
through Japan UNI Agency, Inc.

むすこシュツファイーのために

*

ミヒヤエル・ニーデツキー……。ミ、ヒヤ、エ、ル・ニー、デ、ツ、キー……。へんてこりんだ。自分の名まえを、ゆっくり、ゆっくり書いてみると、なんだかひとの名まえのような気がする。まるで、いまはじめて見たり聞いたりした名まえみたいだ。

またまたぼくは、ゆめを見ているらしい。ねむっているわけでもないのに……。でも、そうじ機きがうなっているあいだは、なにをしよう、安心あんしんだ。

わあっ、ひきょうだよ！　だしぬけにだれかの手がぼくのかたにさわる。ふりかえって見なくても、だれだかぼくにはわかっている。ママだ。意地いじがわるい。そうじ機きをかけっぱなしにしておいて、こっそりぼくのようすを見にくる。おまけに、もちろんノックだってしない。はいるときはノックをして、と何回いったか知れやしない。ぼくだって、いきなり寝室しんしつにはいったらおこられる。おなじりくつなのに……。

「またひるまから、ゆめを見ているのね……。」

そんなこと、いわれなくなつて、自分でわかっている。でも、しゆくだいがとつても

たいくつなんだ。やる気がしない。まるっきりやる気がおこらない。あした、早めに学校へ行って、レッヒエナウアーにうつさせてもらおう。算数がいちばんよくできるのは、レッヒエナウアーだ。

ママが、すいとり紙を手にとる。

「すいとり紙に、自分の名まえを十回もならべて書いて、なにか意味がある^いとも思っているの？ それに、みんなノートにしまっているじゃないの。」

ほんとにまぬけな話だ。インクのしみだらけで、ノートに書いたしゆくだが、はんぶんくらい台なしになっている。もういちど書きなおしをなくちゃならない。

なにもいわなくてもいいさ、ママ。わかったよ。これじゃあ、きょうはテレビは見せてもらえないね。なんだって、きょうなんだ？ 『ボナンザ』をやる日なのに……。

ぼくの思ったとおり、ママはなにもいわない。ママは、わかりきったことは口に出さない人だ。だまって、さっさとへやから出て行く。

あの目だけは、やめてくれないかなあ。なさけなさそうな目。ほんとうにがっかりしたわ、って目だ。ぼくをしかりたいなら、ちゃんとどなってしかってくれたほうが、ずっとらくだ。なにもいわないで、ただ目をまんまるにして、なさけなさそうにぼくを

見る。あれほどこいやなものはない。あたまがおかしくなりそうだし！

そうさ、なにもやる気がしないんだ。外に行く気もおこらない。また雨がふりだしている。

自分の名まえを、もう二、三回書いてみる。サインのれんしゅうだ。こんどは、すいとり紙の上にじゃない。

ぼくがサインすると、一回ごとにちがったかっこうの字になる。ママがサインすると、月曜日に書いたのも金曜日に書いたのも、おなじに見える。ぼくの字ときたら、時間がたつたびにかわる。

こんどは、ねんいりに書く。うまくいきそうだ。いいかっこう……。おとなみたいにじょうずに書けた。

おじいちゃんから聞いたことがある。おとなの字になるのは、早くても十六さいだつて。そうすると、ぼくはまだ六さいたりない。六さいと二か月と三日。とおい、とおい先の話。

おじいちゃんのへやに行こうかしら？　もしかすると、お話を聞かせてもらえるかもしれない。むかしのお話。それとも、おじいちゃんがあつめた、ずっとまえのお金でも

見せてくれるかな？ 古い本をばらめくって見るのもおもしろい。

ぼくは、足音をたてないようにしてへやから出る。ママは台所だいじょうしよにいる。声が聞こえる。ノボトニーさんとおしゃべりをしている。

ノボトニーさんは、毎日うちへきて、そうじをする。ぼくはノボトニーさんが好きじゃない。キンキン声で話す。まるで、きかんしゃの汽笛きてきのようだ。おまけに、ぼくを赤んぼみたいにあつかう。「ミイーチャン！」……そうよばれると、ぼくはいちもくさんにげだす。

*

おじいちゃんは、ぼくたちとおなじうちの中に、小さな、自分のうちをもっている。自分のうちといたって、ほんとうは大きなへや一つしかない。でも、おじいちゃんはへやとはいわないで、わたしのうちという。それにおじいちゃんは、一へやあればいい。食べたり、おふろにはいたりするのは、ぼくたちといっしょなんだから。ぼくたちのうちは、ずいぶん古い。人間なら七十九さい……。おじいちゃんとおなじくらいとしを

とっていることになる。おじいちゃんがまだわかいとき、このうちを買った。おくさんと三人の子どもと住むために……。三人の子どものうちの一人が、ぼくのパパだ。

うちは、あまり大きくない。パパとママ、それにねえさんとぼく、それともちろんおじいちゃん、この五人にぴったりの広さだ。

「むかしは、住むのにもっとせまくて十分だった。」と、おじいちゃんはいっている。ぼくも、そのとおりだと思う。だって、いまおじいちゃんのいるへやに、子もりをする女の人が住んでいたんだから……。パパが、まだ小学生だったころのこと。そのころ、ニーデツキー家は、子どものおもりをする人までやとえた。でも、むかしの話だ。

おじいちゃんが、ベッドで本を読んでいる。いつも考えてしまうんだけど、本が重くないのかしら。だって、おじいちゃんは、かけぶとんの上に本をどっさり積みかさねている。ママはそれを見て、しょっちゅうおこる。

「おじいちゃんの本は、ほこりだらけよ！ 三日に一ぺんは、カバーをかえなきゃならないんだから！」

ママがどなつても、おじいちゃんは本気にしていない、とぼくは思う。いつもニヤニヤわらっている。たまには、わざと耳をふさいで見せる。そんなとき、ママはカンカン

になって、あったけの力で、ボタンとたたきつけるようにドアをしめて出ていく。
いまでも、おじいちゃんはニヤニヤわらっている。でも、これはぼくを見たからだ。
「しゅくだいをする気がしないのかい？」と、おじいちゃんは聞いて、まだニヤニヤしている。

おじいちゃんは、ひとの心が読める。あいてがだれだろうと、なにを考えているかは、顔を見ればわかる、とおじいちゃんはいう。

ぼくは、おじいちゃんのそばによって、ふとんの上にすわる。

「ノボトニーさんが、いまきてるところなの。」と、ぼくがいう。おじいちゃんは、口の中でなにかもぐもぐ返事をするだけで、本から目をはなさない。

ぼくも本を一さつとって、ページをめくる。『原始民族の女』という本。はだかの黒人の女の写真だらけだ。ばかばかしい本だと思っけれど、おじいちゃんは気にしている。はだかの黒人女には、はるかに文化があるのかなんとか、おじいちゃんがいっているのを聞いたことがある。

ぼくはまた立ちあがって、へやの中をちょっとあるく。

うちの中で、おじいちゃんのへやがいちばんすてきた。すばらしいへやだと思う。で

も、パパとママはいつている。おじいちゃんはちょっとあたまがおかしいって。どうしてそんなことをいうかといえば、おじいちゃんはやたらにものをあつめているからだ。

おじいちゃんのへやには、ないものはない。

「まるで古道具屋よ。」といって、ママはためいきをつく。ママがそうじをするとき、なにか一つでもすてたら、おじいちゃんはずいいきおいでおこる。一つ一つが、おじいちゃんにはたいせつなのだ。長いあいだ生きてきたから、いろんなものがある。それをそっくりとってしまっている。おじいちゃんから見れば、どれもだいじなものだ。「記念の価値」のあるもの、とおじいちゃんという。それに「どれ一つとってみても、思い出があるのだ。」ともいつている。

二年か三年まえ、まだおじいちゃんの足がじょうぶだったとき、ぼくはよくドロテウムにつれて行ってもらった。ドロテウムというのは、ウィーンの第一区にある質屋で、ずっとむかしからあって、だれでも知っているみせだ。そこでは、せり売りもして、おじいちゃんもいろいろ買った。ドロテウムのことを、ウィーンの人たちは、「ドロテーおばさん」とよんでいる。

「ガラクタばかりだ。」と、パパはいう。でも、パパは、おじいちゃんのたのしみのじゃ

まはしない。

ぼくは、ガラクタとは思わない。おじいちゃんは、木のはこを一つもっている。そこには、めがねが百こははいっている。それに古いとけい……懷中どけい、うでどけい、水中どけい。らしんばん、とれたはり、うごかない電圧計、ぼうえんきよう……。

へやのまん中の、おじいちゃんのベッドのすそにくつつきそうなところに、書きものづくえがある。とても大きなつくえて、奥は二メートル近くあり、はばときたら、とてつもなく広い。左右にひきだしが、たくさんついている。左の、いちばん上のひきだしには、使いふるしたボールペンや、まんねんひつ、ペンじく、それに色えんぴつやクレヨンなど、書くのにいるものが、なんでもつめこまれている。ずっとむかし使ったそでカバーまで、何本かとってある。どれも、まっ黒で、てかてか光っている。インクつぼも、十こはある。赤インクのはいつているのがあって、その色ときたら、ほかに見たこともないような赤だ。血みたいに赤く、かわったにおいがする。

つくえの上には、ありとあらゆるものが、ごっちゃごちゃにおいてある。書類ばさみがある。おじいちゃんが、会社を定年でやめたとき、会社からもってきたやつだ。むかし、おじいちゃんは、ライヒエルト社で会計主任をしてはたらいっていた。その会社は、

ぼうえんきょうとか、ぼうえんきょうのなかまみたいなものをつくっている。けんびきょうやカメラのレンズもこしらえる。おじいちゃんは、けんびきょうも、いくつかもっていて、ときどきのぞかせてくれる。でも、たいていのはこわれていて、もうよく見えない。

おじいちゃんのベッドは、しんちゅうでできている。ベッドの下には、おまるがおいである。でも、おじいちゃんつかは使わない。そのとなりに、こげ茶色の、ふたのついた大きなとうきのつぼがある。それに塩水しおみずをいれて、その中にゆてたまごをつけておく。そうやっておくと、たまごは、二、三か月もつ。

かべには本だながならんでいて、本がいっぱい、てんじょうにとどくほどつまっている。ロシアやポーランドやチェコスロバキアの本も、たくさんある。おじいちゃんは、ブトバイスで生まれた。そこは、いまではチェコスロバキアの中であって、ブジェヨビツェとよばれている。むかしは、オーストリアの領土りょうどだった。

おじいちゃんの本は、たいていどれも、ぼくにはおもしろい。古い辞書じしょをばらめくって見るのが、いちばんおもしろい。いや、辞書じしょではなくて、事典じでんだ。おじいちゃんじでんは、二十さつもある、マイヤー百科事典まいや びやく じでんをもっている。

むかしの、お医者^{いしや}さんの本も、ぼくのすきな本だ。人間のからだをかいだ、おりたたみ式の^{しき}絵を広げてみると、いつもふき出してしまふ。男^{しし}のからだがいくつものっているのに、どれにもチンポコがない。チンポコがないなんて、とぼくは思ってしまう。むかしの人は、はずかしがり屋^やだったらしい。でも、どうしてそんなにはずかしいのか、わからない。おじいちゃんも、しょっちゅういっている。もし神^{かみ}さまが、わたしたちのはだかすがたを見なくなったら、赤んぼは、ズボンをはいて生まれてくるはずだって。

おじいちゃんに、コーヒーをいれてあげる。カフェインぬきの、ミルクがたっぷりやつ。おじいちゃんのへやには、つくえのわきに電熱器^{でんねつき}があつて、水道もきいている。だから、コーヒーをわかすのに、いちいち台所^{だいせう}に行つて、ノボトニーさんの、ばかばかしいおしゃべりを聞かされずにすむ。おじいちゃんも、ノボトニーさんが好きじゃあない。おじいちゃんが、ふとんをはねのけて、しきふを手のひらでたたく。ぼくは、すぐさまくつをぬいで、おじいちゃんのわきにもぐりこむ。とってもあたたかい。ぼくは目をつぶる。

すぐにお話^わがはじまるだろう。いつもじゅんばんがきまっている……。ぼくが、するりとベッドにはいつて、ふとんをかぶる。ふとんをちゃんとかぶりおわると、お話だ。

「むかしむかし、あるところに一人の男の子がいました。その子の名まえは、ミヒャエル・ニーデツキーといました……。」と、おじいちゃんが話しだす。はじまりは、いつもおなじ。「……その子は、何百年もまえに、あつい国のスペインに住^すんでいました。とてもぼうけんずきな男の子でした……。」

ぼくは、うっとりしてしまふ。そして、からだをおじいちゃんのわきばらにぴったりくっつける。おじいちゃんは、だれよりも話がうまい。いつも、ぼくがお話の主人公^{しゅじんこう}だ。きょうのぼくはクリストファー・コロンブスで、アメリカを発見^{はっけん}する。はじめてぼくの足でアメリカの土をふんで、ここはインドだ、とかんちがいする。

目のまえに、いろんなものがうかんでくる。コロンブスのぼくと、ぼくの命令^{めいれい}をだまって聞くけらいたち……。

ときどき、おじいちゃんの声がとおくのほうで聞こえるような気がする。おじいちゃんの声が、だんだん、だんだん小さくなる。ぼくは、いつまでもじっとおじいちゃんの顔を見ている。

お話を聞いているとき、ぼくはおじいちゃんの顔を見ているのがすきだ。おじいちゃんのかみの毛は、とてもきれい。まっ白で、ずいぶん長い。おじいちゃんは、あたまを

